

になってからは、今までふざけて全然しようにとしなかったリズムも一生懸命出来るようになり、新しく組みかえた比較的積極性のある年令も近い子どもばかりのグループの中でも、他をも受け入れて上手にやってゆけるようになってきた。

Y男の場合は注意したいと思う点に直接ふれずに間接的に良い方を強調して、自分で気付いてゆくようにという方法をとったが、子どもによつては、このやり方では効果が上らないこともある。子どもによつてそれぞれ異つた方法をとつてゆくわけであるが、どのような場合でも最もよく注意しなくてはならないのは、その子どもの成長の波に乗つて、速度に合わせているかということである。せつかく伸びてきているもの、本来持っている良いものを曲げてしまつたり損ねてしまつたならば、個性教育の意義は無くなつてしまふと思ふ。

あらゆる機会を通じて幼児と共に学び、共に生活して子どもを良く理解し、忍耐心を持つて実行してゆくことこそ、個性に応じた教育をなし得る根本だと思ふ。(東京)

個性に応じた教育

青 木 道 代

個性とは、私はそれを人間一人ひとりを持つている人格性として理解したいと思ひます。Aという人間はAという人間として、何をもつてもかえることの出来ない尊さをもつて、彼の場を占め、何人もおかすことの出来ない彼らしさを彼の責任において主張している、BもCもDもこの地上にあるすべての人間が持つてゐる、また平等に主張すべき個々の人間性、これを個性と言つてよいのではないかと思ひます。

現代日本の社会において、教育の問題は渦をなして私たちを押し流そうとしています。勤務評定、道徳教育の問題、教案の画一化、すし詰め学級などと。こうした問題は直接、間接に、また現在において将来において私たちの問題であり、すし詰め学級

の嘆きは地方の幼稚園保育所にとつては小・中学校以上のものがあります。こうした教育の画一化、教師の不足、設備の不備という荒波の中で私たちは今こそ思いをひそめて子どもたち一人ひとりのことを考え、個々の幼い魂と語り合はねばならないと思ひます。百匹の中の迷える一匹の羊、それは画一化した教育企業の目からみれば百分の一の価値しかないかもしれませんが、私たち子どもを愛する教師、父母の目には、九十九匹をおいてもその一匹をさがし求めねばやまない尊い何ものにもかえがたい価値を持つてゐるはずで、百人の子どもたち一人ひとりが、そのような尊さを持つて私たちの心に受け入れられる時にはじめて私たちと子どもとの深い人格的な交わりが

可能になり、子どもの中に混沌として眠っている可能性をさがし出して、いきいきとさせる教育の仕事が始められるのではないでしょうか。

ロマン・ロランが書いた「ジャン・クリストフ」の第一巻の項に、幼いクリストフが自分の中に眠っている音楽の可能性に、次第に目覚めてくる有様が、実にいきいきと描かれています。この幼い目覚めをクリストフの祖父、老音楽家ジャン・ミシェルはクリストフがひとりで遊んでいる部屋のドアをそと開けておいて、愛情深いまなざしで見つめ、発見し、手伝ってやるのです。

いわゆる才能教育も、こうした子どもの優れた芽生えを助け、正しく育てるものであるならばよいものでしょう。しかし、子どもの可能性に対する過度の期待から、また虚栄心から、無理な教育を押しつけ、伸びるべき柔らかな芽生えをさえも摘み取るようなことを私たちはしていません。近頃、急増した「おけいこ事」の流行の中に私はそうした危険を感じます。

クリストフは、やがて、彼の才能を売り物にして虚栄と出世の手段にしようとした父のために、また、彼の才能を甘やかす一方のミシエルのために、伸びかけた芽をひからびさせてしまいそうになります。この危機から幼いクリストフを救ったのが彼の叔父ゴットフリートでした。彼は言います。「お前は作曲のために作曲した。偉い音楽家になるために、人に感心してもらうために作曲した。お前はごう慢だった。お前は嘘をついた。音楽は度ましくして真実であることを望むのだ。そうでなかったら音楽なんか何だろう。こうしてクリストフは、ゴットフリートから彼の可能性の正しい流路を導いてもらったのです。

こうした優れた可能性に恵まれた子どもたちと反対に、可能性の低いまたはそれを見出しがたい子どもたちのことも私たちは忘れてはならないと思います。身体障害児、精神薄弱児童と言われる子どもだけでも全国約一二五万、この他にいろいろの面で保護を必要とする子どもたちを合わせたら、ずいぶんたくさんになる子どもたち

ほとんどが社会から見捨てられ、適当な教育も受けずに放任されているのが日本の現状です。

社会の大多数の元氣な子どもたちのかけに隠れて、これらの子どもたちは目立たないかもしれません。けれども少数だから、手がかるからという理由で、この子どもたちの弱いながらも成長すべき可能性が放任されおさえつけられてはならないと思います。岸本英男氏の「ゆりかごの学級」(平凡社刊 人間の記録双書)はこうした子どもたち一人ひとりの教育について大きな示唆を与えてくれます。「人間は精神病者でない限り教育は可能である。それゆえにこそ教育の機会均等があるのではないか」(二〇四頁)どんな子どもにでも可能性を見出してそれを揺り動かす忍耐と情熱を私はこの書から学びました。天才児から精薄児まで、金持の子であろうと貧乏人の子どもであろうと、世界に住むすべての子どもの一人ひとりの人格はどんなことがあっても尊ばれなければならず、個々に応じた教育はなされなければなりません。

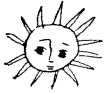
子どもが本当にその子どもらしく持っている可能性を、力一杯出しきって、その子どもでなくては持てない持味を、個性を持つようになる。そうした教育がなされねばならないと思います。

この千差万別の幼児たちを互に接触させて社会生活を与え、また広く深く新しい経験を与えていくことによって、未発達、未分化の状態にある幼児の人格を徐々に成長させ確立させることにまず私たちは努力しなければならぬと思います。人間として、肉体的、心理的にまだ一応の段階にも達していない未分化の状態にある幼児に対して、私たちは慎重に接したいと思いません。これがこの子の個性だと、早のみ込みしたり、あまりに早く、子どもの個性を引

き出そうとすることによって、期待しすぎたり、落胆しすぎたりしないようにしたいと思えます。

両親と教師が手を取り合って、愛をもつてしかも冷静に子どもを見守り、医学や心理学の助けを借りつつその成長を助けていくこと、子どもの周囲の環境を出来るだけ整えて、子どもがのびのびとその可能性を発揮出来るようにしてやること、——幼児期における「個性に応じた教育」とは結局このことに尽きるのではないかと思いません。具体的には、子どもたち一人ひとりの発達過程に応じ、また環境設備に応じ、その他さまざまな条件に応じて、私たちがその場その場で工夫をこらし、考えていかねばならないのではないのでしょうか。(岩園)

いろいろの子どもたち



梅 津 慶 子

私たち保育者は一人ひとりの幼児の個性を理解し、尊重し、その伸びてゆくのを助けるものでなければなりません。十人十色の幼児の個性を深く洞察し、一人ひとりの幼児に合った処方箋を持つと言うことはたいへんに大切なことであります。しかし一人で数十人の幼児を扱う私たちにとって、このことはたいへんむずかしいのであります。幼稚園に働いてまだ二年目であったその頃の私にとって、一人ひとりの幼児に対する理解よりも、何を与えようかとの生活に追われ毎日を汲々とすごしておりました。幼児たちは一応私の意図する方向について来ているものと安易な満足を覚えておいた頃、Rという男の子が途中入園してまいりました。入園当時母親は身体の大きな彼をひきずるようにして連れて来てはサッと帰ってまいります。Rは毎朝大暴れを一通りすまずとムツツリと立っているばかりでした。もちろん他の幼児たちと律動や仕事をするとすることはありません。こうしてすごしていたある日、誕生月を調べることになり、自画像を描いて、自分の生れ月に